

31 徳川家康と南郷地区の紹介

筆 者 守屋 輝年雄

陣場峠

掛川駅より南へ徒歩約30分、掛川市上張と上内田、板沢の境界にある山である。北方に掛川市を一望し、その背景に赤石山脈が連なる。東北には富士山と栗ヶ岳が相映し、これに裾を引く牧ノ原が一線を画く。南西には小笠山、山脈が東西に連なる。その支脈の幾つかが谷を形成し北方に延びていて手に取るように見える。この山を青田山(108m)又は青田嶺と言う。永禄11年12月(1568年)、家康は今川氏真を掛川城に攻めた時、青田山に砦を築き陣地としたので、後この山を『陣場峠』と呼ぶようになった。この戦いの時が元で地名となったのが矢崎(註①)である。山腹に古道がある。相良や地頭方など榛南地域より、塩や干魚など海産物を信州に運んだ〈塩の道〉である。この峠は青田嶺越えの難所といわれた。この塩の道は掛川から秋葉街道を経て信州に至る重要な輸送路であった。明治23年にこの道路を改修した。後明治28年に、この山に隧道を掘り(旧青田トンネル)、人、車馬の交通の便を良くした。

天正2年(1574年)5月12日、武田勝頼は2万5千の大軍を以て高天神城を包囲した。城主小笠原長忠は早速使者を浜松城の家康に遣わし、武田軍の様子を伝え、援軍を送ってくれる様要請した。家康はさらに織田信長へも援軍を要請した。家康は使者に援軍が出るときは「青田山」に狼煙を揚げ高天神城へ知らせるように命じた。青田山に狼煙揚げること三回、しかし援軍来ず、城兵食料無くなり力尽きて6月17日高天神城落城、武田軍に降る。

この時信長の援軍は今切りの渡しまで来ていて、信長高天神城落城の報を受ける。落城があと数日遅れ、そして信長、家康の援軍が高天神城の戦いに間に合っていれば高天神城々外で大規模な戦いが繰り広げられ、高天神城は落城しなかったかもしれない。

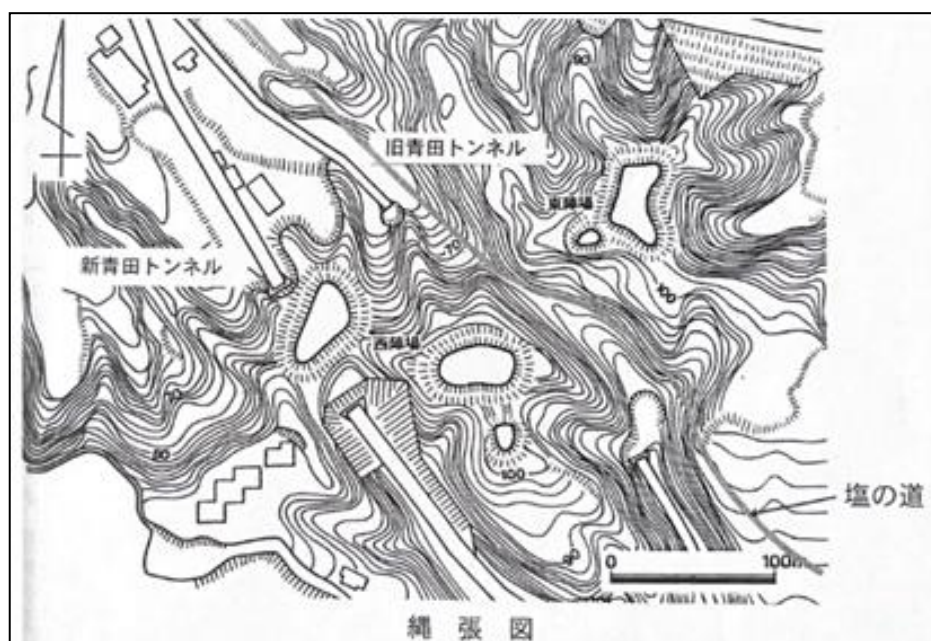
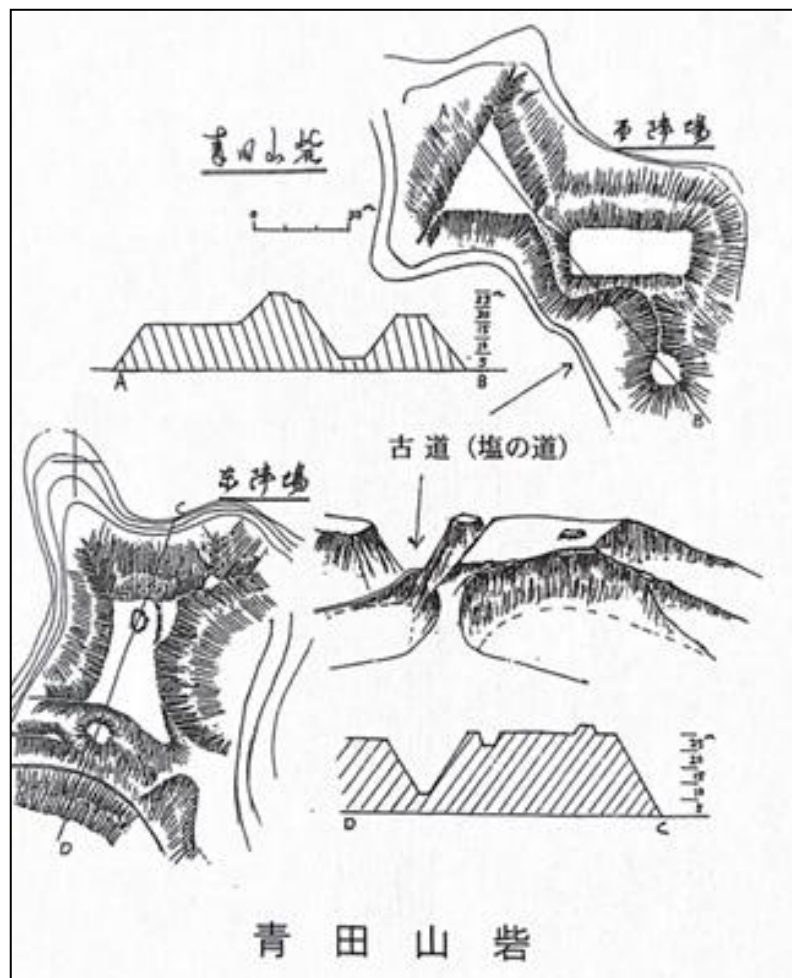
尚、明治維新、官軍が江戸城を攻めた時、征東大総督有栖川熾仁親王殿下が東上のおりに掛川に宿泊した。その時陣場峠に登った。明治29年陣場峠頂上に、征清彰功之碑が建立された。(明治27～28年の日清戦争の戦勝を記念して、南郷村の村民が建立した。)

註① 矢崎

徳川家康が掛川城を攻めるとき、永禄11年(1568年)青田山に砦を築いた(後の陣場峠)。ここより矢を放った。その矢が地内に届いたので『矢崎』と言うようになったといわれている。また、とりで山(現存する)より放った矢が届いたので、矢崎という地名になったと言う説もある。昔は、小さや谷崎と言った。それがなまって矢崎になったと言う説もある。

陣場峠より掛川市街を俯瞰







陣場峠立て札



塩の道（註②）石標



征清彰功之碑

註② 塩の道（信州街道）

信州街道とは、相良街道、秋葉街道の総称で、俗に『塩の道』と呼ばれた。国内に海辺を持たない信濃へ塩を輸送した塩の道は、信州街道といった名で今に残されている。相良を起点とし、掛川を經由（中継点）、森町、犬居、秋葉山を経て青崩峠を越え、信州に至る街道である。

板沢をすぎると、難所の青田峠である。青田峠を越えると佐野郡南郷村へ出る。南郷村上張の、拳張神社と大日寺の間を通り抜けて行くと掛川宿の塩町である。塩町で塩等海産物の取り引きをした。

青田峠は徳川家康が掛川城を攻めるとき砦とした所で、今では陣場峠と呼ぶ。塩町の名の由来は、相良、川崎の塩を商う問屋があった事に起因する。掛川誌稿には、「昔八塩町ノミニテ塩ヲ賣ル」とある。相良街道の起点であり、相良よりの終点でもある塩町は、塩等海産物の取り引きがあった所で、掛川を中継点として、問屋、商人たちより信州に運ばれた。

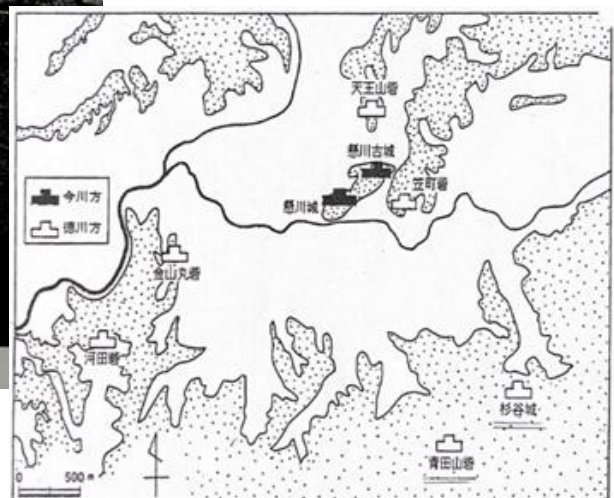
杉谷城趾

永禄11年(1568年)徳川家康は武田信玄と密議を交わし、大井川を境として駿府の今川氏真を侵略せんとし、12月東西より攻める。氏真は駿府を逃れ掛川城の朝比奈泰朝を頼りにここに籠城する。泰朝は氏真を護ってよく戦った。家康は掛川城の守り堅く簡単には落ちないと、周囲に天王山砦、笠町砦、金丸山砦、青田山砦を築かせ、掛川城を囲んで攻撃したがなかなか落とすことができなかった。家康はさらに4ヶ所の砦を築いた。その内の一つが『杉谷城』である。『掛川誌稿』に「西の谷の中姥ヶ谷と云う所に城山あり何人の砦にや、山上溝壘の趾儼然たり」とあるだけで、はっきりしたことは解らなかった。最近の区画整理事業の工事で、砦の跡が見つかり発掘調査が行われ、三つの曲輪と堀切りや堅堀を備えた砦であり、出土遺物から16世紀後半家康が掛川城を攻めたとき築かれた『杉谷城』であることがはっきりした。主曲輪は南北20メートル、東西10メートルの広さであり、堀切りは2ヶ所、堅堀が1ヶ所で、堀切りは、山の尾根伝いの道を途中で深く切り落とし、堅堀は、山の斜面を深く掘り、それぞれ敵の移動や攻撃を防ぐためのものである。『杉谷城』は、掛川城を攻めたときだけ使ったものであったと思われる。その後戦いは和平に持ち込まれ、講和交渉が進み、永禄12年5月15日、掛川城は無血開城となる。

(付記) 掛川城を出た今川氏真は、妻の実家である小田原の後北条氏に引き取られることになる。家康は幼少の頃竹千代と言った。8才より19才までの12年間今川義元の所で暮らす。竹千代の父広忠が義元の力に頼ったとき竹千代を人質として預けた。義元は竹千代を庇護し、その成人をまって松平家の家督を保証したのではないかと思う。義元は自分の姪を竹千代に嫁がせている。また竹千代に義元の軍師大原雪斎の薫陶を受けさせ、14才のときに元服したが、加冠は義元が自らつとめている。名も元信に改めた。元の字は義元の元の一文字を拝領したものである。家康は今川義元には恩義があったので、義元の子氏真の命を助けたと考えられる。



杉谷城趾発掘調査



懸川城を囲む家康方の砦

南郷郷土史年表
(1292 年～1869 年)

西 暦	年 代	記 録
1292	正応 5	大日寺、真言宗として開創される。（大日如来の像あり）
1420	応永 28	十七夜観音を氏神様として祀る。
1472 頃	文明元	この頃今川義忠が家老朝比奈泰熙（3 千石）に命じ掛川古城を築城。 (築城年代諸説あり)
1513	永正 10	懸川城築城、 朝比奈泰能古城より移る。
1569	永禄 12	徳川家康は、 掛川城攻略に際し、 青田山に砦を築く。 (後に陣場峠と呼ぶ) この頃杉谷城もできる。 5 月、掛川城今川氏真、 徳川家康に攻められ落城。 9 月、升谷松平玄蕃頭清宗は掛川の加番として、塩井川原(伊達 方付近) の砦を守った功により上張、杉谷、亀の甲の三村を賜る。
1574	天正 2	大日寺は禅宗の一派である曹洞宗となる。 6 月、高天神城主小笠原長忠は武田勝頼の猛攻に落城。
1583	天正 11	挙張氏神様は時の庄屋、 原市太夫・平出八郎兵衛が江戸日本橋の 大工喜原孫七郎梁に造らせ、相良港に舟で運び、氏子総出にて現 地まで運び鎮座した。
1590	天正 18	杉谷 東岩山法念寺建立される。(永江院七世象田与耕大和尚) 9 月、山内一豊、近江長浜より掛川城入城。
1596	慶長元	山内一豊、掛川城天守閣完成、城郭並びに城下町整備。
1601	慶長 6	山内一豊、関ヶ原の功により土佐高知へ転封。
1602	慶長 7	杉谷、杉谷山西光寺建立される。
1604	慶長 9	伊奈備前守忠次の検地、検地石高、杉谷村 267 石 4 斗 1 升 7 合、 上張村 609 石 4 斗 5 升 1 合。
1605	慶長6～9	御朱印除地 2 石 5 斗 法念寺・西光寺、御除地 3 石 大日寺、1 石 長久院、 3 石 瑞竜寺。（上張）
1620	元和 6	元和の頃より板沢山は南郷村が年々12 石（30 俵）を定納する。
1633	寛永 10	2 月、杉谷で両谷神社勧請(掛川城 19 代城主の頃)
1670	寛文 8	3 月、杉谷の神明宮勧請（懸川城 26 代城主の頃）
1674	延宝 2	5 月、飯塚与左衛門が杉谷の天王、神明宮に絵馬を奉納した。
1690	元禄 3	2 月、懸川城下大火災、下俣より新町まで焼失。
1707	元禄 4	11 月 23 日 富士山大噴火、宝永山できる。懸川の家ことごとく転 倒する。
1713	正徳 3	3 月、杉谷の人、七兵衛は大判 9 枚掘り起こす。 城主に上納した。 城主はその正直を賞し、小判 110 両を与えた。

西 暦	年 代	記 録
1787	天明 7	縣川の字を掛川と書くようになった。
1805	文化 2	太田資愛、『掛川誌稿』の編集を始める。あと代々城主に引き継ぐ。
1830	天保年間	上張村戸数 63 戸、杉谷村戸数 28 戸であった。
1836	天保 7	天保の大飢饉で藩主太田備中守資始(のち老中となる)は領民に 対して松の皮を食用とするよう布告した。
1851	嘉永 4	村中安全を祈願して庚申塔を矢崎地内に建つ。
1854	安政 1	7 月 12 日 上張河井重蔵氏は河井弥八郎高重の長男として生まれる。 11 月 4 日 安政大地震 (M8.4) 震源は東海道沖。
1868	慶応 4	2 月 関東平定のため、官軍征東大総督・有栖川宮熾仁親王殿下 が掛川をお通りになられた際、陣場峠に登る。
	明治元	9 月 慶応を明治と改元。神仏混淆を禁ず。戊辰戦争起こる。
1869	明治 2	駿府藩廃止、静岡藩知事となる。掛川城廃城。

～あとがき～

「掛川の歴史探求フォーラム」に伴う論文募集にあたり、南郷歴史クラブ（現在は、廃部）が収集した資料を基に、平成 16 年に郷土誌南郷編集委員会により編集された「郷土誌 南郷」より、徳川家康と縁のある場所や歴史を抜粋し、今回、改めて整理しました。

「私達の生まれ育ったふる里南郷は、近代化学の進歩や地域の開発、発展と共に今や昔の面影は無くなって来ました。それと共に南郷の歴史も、そして四季折々の行事なども忘れ去られようとしており、何か大切なものが失われて行くような思いがあります。昔からここに住む人、新たに住むようになった人達も、郷土誌により南郷の昔を振り返り『南郷』誕生や、先人の業績、苦労等、数々の歴史を知り、南郷の歴史に近付きふれ合えれば幸いです。そして誇れる郷土を育て、後の世に伝え残せればと心より願うものです。この南郷の地は、掛川から南部方面へ行くときや、南部方面の人々が掛川へ来るとき必ず通る交通の要衝の位置にあります。信州街道、別名『塩の道』が通っていました。現在の東海道本線も、上張を南北に通る計画がありました。また明治から大正にかけて、新道を乗合馬車が大坂(大東町)まで走っていました。」（郷土誌 南郷より）

南郷歴史クラブおよび郷土誌南郷編集委員会の皆さまの郷土への熱い思いに感謝するとともに、郷土の歴史を南郷区民だけでなく掛川市民などにも幅広く知ってもらいたく、「徳川家康と南郷地区」をテーマに、陣場峠と杉谷城趾を紹介させていただきました。

（陣場峠の写真は、すべて自身撮影）

